

# 外来語と英語教育(3)

- 外来語の強勢付加によっておこる変化 -

1980年2月14日

この研究に携わった研究員

森永 誠	石津谷 進	萩野 浩
長 勝彦	青木 弘子	安原 修三
坂神 静	田中 裕子	備里川 正人
師 恵津子		

目 次

序	39
・日本語にとって外来語とはなにか	
1．日本語はかわる	2．日本語にとって漢語・漢字とはなにか
3．外来語とはなにか。また今後、外来語は、どのような存在となるか	
4．日本語と外来語の表記について	
・外来語(英語)はどのように日本語のなかに、うけいれられたか	
1．1)音声 2)文字を媒体として借用された	
2．外来語(英語)は、開音節化して日本語のなかにうけいれられる	
3．インフレクションは脱落する	4．内容語、とくに名詞・動詞・
形容詞が一定の法則にしたがって外来語としてうけいれられる	
5．簡略化されて、定着する傾向	6．最近、原音を保持する傾向
・日本語の発音と、外来語(英語)の表記	
1．強勢リズムと音節リズム	2．モーラ的リズムと非モーラ的リズム
3．日本語の音素(母音・子音)と外来語(英語)のかたかな表記	
・東京方言にあらわれた母音の無声化と、強勢付加によっておこる変化	39
1．東京方言にあらわれた母音の無声化	39
2．子音[p][ts][t]と閉母音[u][i]半開母音[o]	41
3．強勢付加によってあらわれる変化	41
・外来語(英語)の東京方言と、強勢を付加したときにおこる、開節音	
[u][i][o]の無声化・脱落に関する調査・記録	42
1．調査目的	42
2．調査するCV, およびCVCVについて	42
3．調査語彙の資料源	43
4．調査・判定に関して	43
・調査・判定の記録、および母音残存・無声化・脱落に関する傾向	44
1．CV-V={u}	44
2．CV-V={i}	3．CV-V={o}
4．C1V1C2V2-V1={u}	5．C1V1C2V2-V1={i}
6．CVおよびC1V1C2V2のまとめ	44
・外来語と英語教育	47
1．音声面について	47
2．意味面について	48
3．英語教育との関連で	48
後記	
参考文献	48

目次は発表当時のもので、ページの示されていない項目は、このダイジェスト版では省略されています。

ここでは、引用文・参考文献を除いて、訓読みはすべてひらがなで書き、正書法が可能か実験しているところである。

## 序

今日までの日本の英語教育界では、英語を学習した経験のない男女は、英語の習熟度に関して白紙である、ゼロである、という仮説にたっていた。英語の習熟度がゼロでありながら、発音に関しては母語・日本語からの干渉 - マイナス習熟度 - を受け、th や l-r に困難がみられる、という仮説であろうか。はたして、そうであろうか。

研究部(東京都英語教育研究会)は、「外来語と英語教育 - 1」で、「小学校高学年教科書に表れた外来語リスト」に、やく950語を採集し、そのうち英語を通過した語が720語ほどであることを報告している。また「外来語と英語教育 - 2」で、中学校英語教科書(5社)の語彙数やく2300語のうち、外来語として、英語未習の小学校6年生に、すでに意味が理解されていると判断できる語が、約520語あることを報告している。語彙の意味について、英語未習者の習熟度がゼロである、という仮説が誤謬であることは明である。

日本語の語彙について大野晋(おおの・すすむ)氏は、\*1「あと五十年たったら、日本語の語彙はがらっとかわると思います。いまの日本語は漢字が五割、和語四割、片かな一割くらいの割合でできていますが - 中略 - 片カナ語の語彙自体も三割くらいまで広がって行くでしょう」とのべている。このむと、このむまいと、そういう予測がたつらしい。外来語のうち、その70~80%が英語であることから類推すれば、たいへんな変化が進行中であることになる。

発音に関して、英語未習者は習熟度については、あるのか、完全になのか。この問題については、まったくふれられたことがない分野である。和語に対する漢語の場合はどうであったか。和語にモーラリズムをもたらした漢語との、音声上の共通項目はなんであったのか。

日本語の特徴は、文法的にはアルタイ語系で、音韻はC V (子音 + 母音)系である。語末のC (子音)、およびC C (子音連結)はおこらない、とかんがえられている。

今回の研究は、主として、東京方言におこっている母音の無声化の確認がひとつである。いまひとつは、英語の音声上の特徴である強勢を、isosyllabism (等時音節性)を音韻構造にもつといわれる東京方言に付加したならば、どのような変化がうまれるか - 東京方言に現在みられる母音の無声化の法則性との関連をふまえ、これに強勢付加の実験をくわえ、調査・記録したものである。

- ・日本語にとって外来語とはなにか。 - 省略 -
  - ・外来語(英語)はどのように日本語のなかに、うけいれられたか。 - 省略 -
  - ・日本語の発音と、外来語(英語)のかな表記。 - 省略 -
  - ・東京方言にあらわれた母音の無声化と、強制付加によっておこる変化について。
1. 東京方言にあらわれた母音の無声化

日本語はかな表記が可能で、現在もちいられているが、東京方言ではC V のVに無声化

した母音をふくむ構造がうまれている。ス、キ、ク、などの音のなかには、有声化のほか、無声音が生じている。これらの発音の変化がいつごろうまれたかは、あきらかにされていない。しかしながら、東京方言の場合、現在「...です」は「デス」〔desu〕(注. は無声化の符号)、駅長の駅は〔エキ〕〔eki〕、拡声機の拡は〔カク〕〔kaku〕と発音される傾向があることは事実である。音節末の〔イ〕、〔ウ〕については<sup>\*18</sup>「語末の音節で、アクセントの核をなしていない〔キ〕、〔ク〕、〔シ〕、〔ス〕、〔チ〕、〔ツ〕、〔ヒ〕、〔フ〕の各音節に含まれている母音の〔イ〕、〔ウ〕、は有声化して響かず、口構えにとどまって無声化する傾向がある」と、天沼(あまぬま)氏が指摘しているとおりである。これは東京方言にあらわれている変化であり、外来語の発音にも、その傾向が当然あらわれている、といえよう。たとえば、次のC<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>の構造では、印の字が無声化する傾向がある、と考えられる。

ガツプレー、スーププレート、ラフプレー、インキポット、ランチタイム、パンチカード、テキサス、ピンチヒッター

母音の脱落は、東京方言では、モーラのリズムのうち、促音化との関連でとらえられる。たとえば、北海道〔ホッカイドー〕と北西〔ホクセイ〕では、北西の〔ク〕は無声音であるが、ホッカイドーは〔ホクカイドー〕と無声化したのではないであろう。

〔ッ〕と促音化したといえる。促音〔ッ〕など、モーラを母音とかんがえるか、いなかは、ここではふれないこととする。

外国語が外来語としてうけいられるとき、子音に〔u〕をくわえて開音節化するのが、もっとも一般的にみられる原則である。と同時に、語末の〔u〕〔i〕の無声化との関連はどうとらえたらよいのか、という問題がのこる。母音の無声化がいつごろからおこったか、という問題と、かな表記の方法がからまった問題、といえようか。

2. 子音〔p〕・〔ts〕・〔tʃ〕と開母音〔u〕,〔i〕,半開音〔o〕について。

- 母音の無声化を生ずる子音環境の整理と、外国語(英語)を開音節化する母音について

〔k〕,〔s〕,〔t〕,〔h〕については、CV(子音+母音)のVにアクセントの核がなく、Vが〔u〕または〔i〕の場合、その母音が無声化する現象が、東京方言について、指摘されている。このことは、東京方言で外来語(英語)を発音するときについても、無声化がおこると予測される。

1) 子音〔p〕と〔ts〕〔tʃ〕について

日本語の音素として、大坪(おおつぼ)氏は、次の23の音素をあげている。

<sup>\*19</sup>「母音音素 / a, e, i, o, u /

子音音素 / k, g, ʃ, s, z, t, c, d, n, h, b, p, m, r /

半母音音素 / y, w, /

特殊音素 / N, Q / (促音を表す記号)」

無声化の子音〔k〕〔s〕〔t〕〔h〕については、すでにふれた。CVの母音の無声化との関連で、それ以外の子音環境があるか、という問題がのこる。そこで、子音の音素とその異音の表を、前述の大坪(おおつぼ)氏の表からとると、次のとおりになる。

- 省略 -

子音のなかで補足する必要があるのは〔p〕と/c/:〔tʃ, ts〕である。この〔p〕と

〔tʃ〕〔ts〕に閉母音〔u〕および〔i〕をくわえて開音節化したのち、現在東京方言にあらわれているうち〔u〕〔i〕の無声化がおこるか、このこともあきらかにする必要がある。

2) 閉母音〔u〕について

外国語が外来語として日本語にうけいれられるときには、開音節化 - 子音に母音が付加されて、CはCVに、CCはCVCVにかわる - 現象があり、このとき付加される母音は、大部分〔u〕である。

例 kiss [kis] (ki) (su) キス  
desk [desk] (de) (su) (ku) デスク

3) 閉母音〔i〕について

CVの子音が〔tʃ〕〔dʒ〕の場合、付加される母音は〔i〕である。

例 peach [pi:tʃ] (pi) ( - ) (tʃi) ピーチ  
page [peidʒ] (pe) ( - ) (dʒi) ページ

〔tʃ〕〔dʒ〕以外の子音で〔i〕が付加される子音には〔k〕がある。〔k〕には語末に〔u〕を付加する場合と〔i〕を付加して開音節化する場合とがある。

ink [ink] (i) (n) (ki) インキ  
(i) (n) (ku) インク

〔k〕については、最近CVの〔i〕から〔u〕にかわってゆく現象がみられる。上述のインキ インクのほか、stick ステッキでは、アイスホッケーのそれはスティックに、check チッキが意味をかえてチェックに変化してゆくなど、その例である。語末のCVが〔ki〕のままのこっている語には cake ケーキ、deck デッキなどがある。語末のkについては付加する母音の〔i〕には、現在変化がおこっている過程か、ともかんがえられる。

4) 半開母音〔o〕について

CVのCが〔t〕または〔d〕の場合、Vは〔o〕となって開音節化する。

例 heart [hæ:t] (ha) ( - ) (to) ハート  
card [kɑ:d] (ka) ( - ) (do) カード

語末の子音〔t〕,〔d〕に〔o〕が付加されて開音節化した場合、東京方言ではその〔o〕は無声化されないという。かつて日本には〔ti,tu: ,di,du:〕と、〔t〕〔d〕のあとに〔u〕,〔i〕がつづく音があったが、現在はなくなったと、かんがえられている。ただし、外来語のなかで party パーティのように、ふたたび復活している現象もある。CVのC=〔t,d〕は日本語の発音では〔p,s,k,h〕とことなった構造のようである。

アクセントの核がない CVのV=〔u〕,〔i〕の無声化がいつごろ、どこでおこり、それがどのようにひろがっていったのかは、わからない。その無声化も、どの地方で、どのような条件でおこるのかは、わからない。したがって、ここでは東京方言にかぎって、考察することとする。

3. 強勢付加によって あらわれる変化について。

日本語の音にないとされている強勢をくわえて発音した場合、どのような変化が生じるであろうか。すでに母音の無声化が進行している東京方言にこの条件をくわえた場合、英語が外来語としてうけいれられたときに開音節化して付加された〔u〕,〔i〕,〔o〕が、そのままのこるか、無声化するか、脱落するか、という問題がある。もし無声化す

るならば、そこには法則性があるのか、また、母音が脱落するならば、そこには法則性があるか、という問題である。

1) 研究員、および若林俊輔(わかばやし・しゅんすけ)氏、森住衛(もりずみ・まもる)氏に、つぎの外来語(英語)に強勢を付加して発音していただいた結果、法則性がありそうだ、という主観的な判断はできた。しかし、この実験は英語未習者によるべきである、とかがえた。

course      コース      soup      スープ      cake      ケーキ  
sauce      ソース      knife      ナイフ      etc.

2) 英語学習歴のない東京方言をはなす男女の場合、どのような現象がみられるか。おなじ外来語(英語)を東京方言でいう場合と、強勢をくわえた場合と、どのような変化がうのれるか、または、うまれないか。このことは明白にしておく必要がある、とかがえたわけである。

・ 外来語(英語)の東京方言と、強勢を付加したときにおこる、開節音〔u〕〔i〕〔o〕の無声化・脱落に関する調査・記録

1. 調査目的

1) 外来語(英語)を東京方言で発音するときに、開音節化して付加された〔u〕〔i〕〔o〕にどのような変化がおこっているか。

2) 外来語(英語)に強勢をくわえて東京方言で発音するときに、開音節化して付加された〔u〕〔i〕〔o〕にどのような変化がおこるか。

以上の2点について、法則性をさぐり、1)と2)との関連がどのようにあるか、をしることである。

注・今回の調査・判断については、項目によってはさらに音響スペクトログラフによる検証と、英語を母語とするひとたちに、どの程度意味ある言語・英語として理解されるかという調査・検証が必要であろう、と考えている。

2. 調査するCVおよびCVCVについて

1) 子音が構成する音声現象は、つぎの表によって採集し、(4)と(5)はこれをさらにひろげた。

C <sub>1</sub>					
	p	t	k	s	h
C <sub>2</sub>					
p					
t					
k					
s					
h					

2) CVおよびC<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>は、つぎの分類により採集し、(4)と(5)はこれをさらにひろげた。

- (1) 語末の CV - V = [ u ] で、V に強勢なし。
- (2) 語末の CV - V = [ i ] で、V に強勢なし。
- (3) 語末の CV - V = [ o ] で、V に強勢なし。
- (4) C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub> - V<sub>1</sub> = [ u ] で、V<sub>1</sub> に強勢あり / V<sub>2</sub> に強勢あり。
- (5) C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub> - V<sub>1</sub> = [ i ] で、V<sub>1</sub> に強勢あり / V<sub>2</sub> に強勢あり。

3. 調査語彙の資料源

1) CV ( V = [ u ], [ i ], [ o ] ) に関しては、\*20 「外来語と英語教育 - 2」 1979年の表から外来語(英語)を採集した。

2) C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub> ( V<sub>1</sub> = [ u ], [ i ] ) に関しては、外来語から採集することはできなかった。したがって、かなり特殊な英語も採集した。

注. 調査語彙として無意味語をさけた理由は、後日、英語を母語とするひとの検証をもとめて、英語としてどのていど通用するか、しりたいからである。

4. 調査・判定に関して

(1) 録音の台本

上記の表にあてはめて採集した語彙について、2回よんで録音するように依頼した。1回目は指示をしないで、録音者の自然な発音(東京方言)のまゝよみ、2回目は第1強勢と弱くいう文字を指示して、よむように依頼した。

例 CV の構造	第1回・東京方言の原稿	第2回・強勢付加の原稿
CV ( V = [ u ] )	コース	コース
C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> ( V <sub>1</sub> = [ i ] )	ピンチヒッター	ピンチヒッター

(2) 録音者

以下の表で採集した音は、東京都北区滝野川の小学校5年生、男子1、女子1のもので英語の学習歴はない。(注. 60才以上の英語未習者も予定したが、まだ採集していない)

(3) 判定・記録の方法

母音の無声化・脱落の検証については、判定者に以下の例にしめす、下線をふくむリストをわたし、テープをきいて、下線部にしばって判定するよう依頼した。

例. CV ( V = [ u ] )	コース
C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> ( V <sub>1</sub> = [ i ] )	ピン <u>チ</u> ヒッター

判定は、(母音脱落)、(母音の無声化)、×(母音残存)とした。判定に協力していただいたかたのなかに、C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>の構造では、母音の脱落と無声化の区別はしないでよいのではないかと、という意見がおおかった。したがって、C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>のV<sub>1</sub> = [ i ]の判定では、(母音脱落および無声化)、×(母音残存)とした。これを整理すると、以下のようになる。

×の判定を記録した項目 - 5の1)、2)、3)、4) - CV ( V = [ u ], [ i ], [ o ] ) および C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>で V<sub>1</sub> = [ u ] (注. 4 - 5)の2回目は をまとめて と記録)

×の判定を記録した項目 - 5の4) - C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>で V<sub>1</sub> = [ i ]

注．以下の表のそれぞれのわくに x などが2個あるが、うえが男子、したが女子に対する判定である。

(4) 判定者

判定に協力していただいたかたは、大学関係および研究員で以下のかたがたである。若林俊輔(わかばやし・しゅんすけ)、宮腰賢(みやこし・さとる)、森住衛(もりずみ・まもる)、松井司(まつい・つかさ)、以上、大学教員で、以下は研究員である。石津谷進(いしずや・すすむ)、萩野浩(はぎの・ひろし)、安原修三(やすはら・しゅうぞう)、長勝彦(おさ・かつひこ)、野口(青木)弘子(のぐち(あおき)・ひろこ)、師恵津子(もろ・えつこ)、坂神静(さかがみ・しずか)、備里川正人(びりかわ・まさひと)

調査・判定の記録および母音残存・無声化・脱落に関する傾向について。

1. 語末のCV - (V={u})で、Vに強勢がない構造)

語	発音 評定者	東京方言								強制付加								
		若	宮	森	石	萩	長	青	師	坂	若	宮	森	石	萩	長	青	師
カ ッ プ	男	/	/	/	/	/	/	/	/	/								/
	女	/	/	/	/	/	/	/	/	/								/
キ ャ ッ プ	男	/	/	/	/	/	/	/	/	/								/
	女	/	/	/	/	/	/	/	/	/								/
ホ ッ プ	男	x	x	x	x	x	x	x	x	x								/
	女	x	x	x	x	x	x	x	x	x								/
シ ョ ッ プ	男	x	x	x	x	x	x	x	x	x								/
	女	x	x	x	x	x	x	x	x	x								/
スト ッ プ	男	x	x	x	x	x	x	x	x	x								
	女	x	x	x	x	x	x	x	x	x								

- 以下省略 -

6. CVおよびC<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub>のまとめ

1) CV - V={u}, {i}, {o}および、C<sub>1</sub>V<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V<sub>2</sub> - V<sub>1</sub>= {u}, {i}の概観

母音脱落( )、無声化( )、およびその合計をそれぞれパーセントでしめし、これをCVの構造との関連でしめす。

(1) CV - V={u} Vに強勢なし。

	東京方言	37語	666チック	強勢付加	39語	689チック
1) の率	4語	10個	0.15%	427個	61.97%	
2) の率	19語	49個	0.74%	222個	32.22%	
3) + の率	20語	59個	0.89%	649個	94.19%	

(2) CV - V={i} Vに強勢なし。

東京方言	6語	96チック	強勢付加	6語	102チック
------	----	-------	------	----	--------

1)	の率	0語	0個	0.00%	57個	55.88%	
2)	の率	6語	11個	11.46%	35個	34.31%	
3)	+ の率	6語	11個	11.46%	92個	90.13%	
(3) CV - V = [ o ] Vに強勢なし。							
東京方言 29語 522チック 強勢付加 29語 522チック							
1)	の率	0語	0個	0.00%	221個	42.34%	
2)	の率	0語	0個	0.00%	222個	42.53%	
3)	+ の率	0語	0個	0.00%	443個	84.87%	
(4) - 1) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> - V <sub>1</sub> = [ u ]							
東京方言 25語 382チック 強勢付加 25語 399チック							
1)	の率	16語	39個	10.21%	207個	51.88%	
2)	の率	25語	108個	28.27%	164個	41.10%	
3)	+ の率	25語	147個	38.48%	371個	92.98%	
(4) - 2) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> - V <sub>1</sub> = [ u ]							
東京方言 16語 236チック 強勢付加 16語 245チック							
1)	の率	3語	6個	2.54%	167個	68.16%	
2)	の率	15語	48個	20.34%	60個	24.49%	
3)	+ の率	15語	54個	22.88%	227個	92.65%	
(4) - 3) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> C <sub>3</sub> V <sub>3</sub> - V <sub>1</sub> = [ u ] : V <sub>2</sub> V <sub>3</sub> に強勢なし。							
東京方言 9語 135チック 強勢付加 9語 141チック							
1)	の率	7語	15個	11.11%	42個	29.79%	
2)	の率	9語	37個	27.41%	53個	37.59%	
3)	+ の率	9語	52個	35.52%	95個	67.38%	
(4) - 4) (C <sub>0</sub> V <sub>0</sub> )C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> - V <sub>1</sub> = [ u ]でV <sub>1</sub> V <sub>2</sub> に強勢なし、V <sub>2</sub> が語末の構造							
東京方言 5語 155チック 強勢付加 5語 158チック							
1)	の率	4語	24個	15.48%	130個	82.28%	
2)	の率	5語	61個	39.35%	24個	15.19%	
3)	+ の率	5語	85個	54.84%	154個	97.47%	
注 (4) - 5以下は、母音の脱落と、無声化をわけずに で記録した。したがって、+ の率だけが記録されている。							
(4) - 5) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> C <sub>3</sub> V <sub>3</sub> - V <sub>1</sub> = [ u ] 母音の無声化・脱落は で統一記号							
東京方言 25語 1000チック 強勢付加 25語 994チック							
	+ の率	25語	227個	22.70%	633個	63.68%	
(5) - 1) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> - V <sub>1</sub> = [ i ]では、母音の無声化・脱落を で判定							
東京方言 22語 406チック 強勢付加 22語 404チック							
	+ の率	19語	73個	17.98%	192個	47.52%	
(5) - 2) C <sub>1</sub> V <sub>1</sub> C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> - V <sub>1</sub> = [ i ] C <sub>2</sub> V <sub>2</sub> が語末の構造							
東京方言 22語 440チック 強勢付加 22語 439チック							
	+ の率	22語	100個	22.73%	384個	87.47%	

(5) - 3)  $C_1V_1C_2V_2C_3V_3$  -  $V_1 = [i]$   $V_2V_3$ に強勢がない構造

東京方言	25語	658チェック	強勢付加	25語	655チェック
+ の率	25語	252個	38.30%	485個	74.05%

(5) - 4)  $C_1V_1C_2V_2C_3V_3$  -  $V_1 = [i]$  5 - 3)のうち $C_3V_3$ が語末の構造

東京方言	5語	199チェック	強勢付加	5語	198チェック
+ の率	5語	80個	40.20%	158個	79.80%

(5) - 5)  $C_1V_1C_2V_2C_3V_3$   $V_1 = [i]$

東京方言	6語	240チェック	強勢付加	6語	240チェック
+ の率	6語	51個	21.25%	129個	53.75%

2) 上記の概要にみられる顕著な特徴について

(1) 東京方言  $CV - V = [u], [i], [o]$  - にみられる母音の無声化について

$CV$ のうち $V = [u], [i]$ については、わずかに母音の無声化があらわれている。

(1)(2)

$CV$ のうち $V = [o]$ については、無声化は522チェックのうち1個も判定されていない。このことは特記事項とかがえる。

(2) 強勢付加をしたときにみられる、母音 $[u], [i], [o]$ の無声化あるいは脱落について

$CV - V = [u]$ については、689チェックのうち、94%が無声化あるいは脱落を判定されている。

$CV - V = [i]$ については、標本が6語であるため、すくなくすぎる。ただし、無声化あるいは脱落がおこっているのは明白である。

$CV - V = [o]$ については、東京方言では1個も無声化が判定されないのに対し、29語、522チェックに対し、その84%強が、無声化あるいは脱落の判定をうけている。これは、強勢付加によってみられる、おおきな特徴といえよう。

(3) 東京方言  $C_1V_1C_2V_2$ に、全体的にみられる特徴について

上記の $C_1V_1C_2V_2$ の、どの構造においても、東京方言には母音の無声化がみられる。標本として10語以上ひらいたものにかぎっても、以下のようなになる。

$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 1)$	25語	+ の率	38.48%
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 2)$	16語	+ の率	22.88%
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [u] - (4) - 5)$	25語	+ の率	22.70%
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 1)$	22語	+ の率	17.98%
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 2)$	22語	+ の率	22.73%
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [i] - (5) - 3)$	25語	+ の率	38.30%

すなわち、最少17.98%、最大38.48%、平均して20%台でおこっていると、かがえられる。

(4) 東京方言に強勢付加した場合、 $C_1V_1C_2V_2$ に全体的にみられる特徴について

上記の $C_1V_1C_2V_2$ の、どの構造においても、強勢付加した場合、母音の無声化あるいは、脱落の率が増加する。標本として(3)とおなじく、10語以上ひろえたものにかぎっても、以下のようなになる。

$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 1)$	25語	+ の率	92.98%
---------------------------------------	-----	------	--------

$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 2)$	16語	+	の率	92.65%
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [u] - (4) - 5)$	25語	+	の率	63.68%
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 1)$	22語	+	の率	47.52%
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 2)$	22語	+	の率	87.47%
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [i] - (5) - 3)$	25語	+	の率	74.05%

すなわち、最少47.52%、最大92.98%、平均して70%台~80%台で、母音の無声化あるいは脱落がおこっている、とかがえられる。

(5) 東京方言と強勢付加の場合あらわれる、「母音の無声化+脱落」の率について上記の(3)と(4)を、(3)(東京方言)を1としてその倍率をみると、つぎのようになる。

$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 1)$	1 : 2.4倍
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [u] - (4) - 2)$	1 : 4.0倍
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [u] - (4) - 5)$	1 : 2.8倍
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 1)$	1 : 2.6倍
$C_1V_1C_2V_2 - V_1 = [i] - (5) - 2)$	1 : 3.8倍
$C_1V_1C_2V_2C_3V_3 - V_1 = [i] - (5) - 3)$	1 : 2.1倍

すなわち、およそ2倍から4倍のあいだで母音の無声化あるいは脱落がすすんでいる、とかがえられる。

〔付記〕 音声提供者(小学校五年生男女各1名)の特徴

テープを視聴して判定していただいた松井司(まつい・つかさ)氏からつぎのコメントをいただいている。

ア. 東京方言は普通のいいかたである。

イ. 強勢ではなくトーンの調節による不自然な日本語になっている。

ウ. 男女とも、強勢ということについて、ずいぶんまごついているかんじをうけた。

## 外来語と英語教育

### 1. 音声面について

外来語(英語)の東京方言と、強勢を付加したときにおこる開節音[u][i][o]の無声化・脱落についての調査・検証は、現在は過程の段階である。さらに英国人・米国人に英語の意味をもつ語として、理解されるか、されないか、検証する必要がある。現段階ではの6の表のように、東京方言では、 $C_1V_1C_2V_2$ の構造のうち、ポップス、ソックス、ミックス、デスクの構造では、母音の無声化・あるいは脱落が50%以上みられる。標本がすくないという難点はあるが、 $C_1V_1C_2V_2$ で $V_1 = [u]$ では、25語について38%、母音にすくなくとも38%無声化がおこっている。そのなかには、母音脱落が、促音(っ)以外におこっているか、という疑問もふくまれている。スペクトログラフによる検証が必要となる。

CVおよび $C_1V_1C_2V_2$ について強勢を付加すれば、上記の表にみられるように、かなり規則的に母音の脱落・無声化がおこっている、と判断できる。

外来語(英語)のかな表記については、グレイディングが必要であるが、どこまで可能

であるか、また不可能であるか、調査する必要がある、とかんがえている段階である。

## 2. 意味面について

外来語(英語)の意味と理解度については、中学校英語教科書の約2300語のうち、23%にあたる、約520語が外来語として、小学校6年生に理解されている。内容語に限って外来語(英語)で、英語未習の小学生を対象に、千語、あるいはそれ以上の、意味を理解されている語(英語)のリストを作成することも、可能であるかもしれない。その場合、各語のうち、どの意味で外来語となつてうけいれられているか、またその意味は、その語の意味の何パーセントをしめるか、についても調査する必要がある。

## 3. 英語教育との関連で

意味面からすでに理解され、発音面から、かな表記で、英語を母語とするひとたちから理解される語彙リストを作成できるならば、中学校、高等学校の英語教育に有効であるばかりでなく、一般社会人にも、やくにたつてあろう、とかんがえられる。ただし、拙速はさけたい。

## 参考文献

- \* 1. 大野晋：七五調の周辺(座談会)：論集「日本文化3 - 日本文化の表情」講談社現代新書 p 178
- \* 2. 柴田武：日本語リズムの地域差：論集「日本文化1 - 日本文化の構造」講談社現代新書 p 229
- \* 3. 同上 p 231
- \* 4. 飛田良文：漢語の読みと同音語：和語漢語：文化庁 p 48
- \* 5. 梅棹忠夫：現代日本文字の問題点：論集「日本文化2 - 日本文化と世界」講談社現代新書 p 200, p 203
- \* 6. 森岡健二：明治期の漢語：和語漢語：文化庁 p 28
- \* 7. 鐘ヶ江信光：中国語辞典：大学書林
- \* 8. 高木定敬：記憶のメカニズム：岩波新書 p 168
- \* 9. 外来語「ことば」シリーズ4：文化庁 p 8
- \* 10. 矢崎源九郎：日本の外来語：岩波書店 p 88, p. p181 ~ 182
- \* 11. 柴田武： \* 2. に同じ, p 228, p. p 230 ~ 231
- \* 12. 南不二男：日本語はどんな言葉か：ことばシリーズ10：文化庁 p 37
- \* 13. 水谷修：外国語としての日本語：ことばシリーズ10：文化庁 p 87
- \* 14. 大坪一夫：天沼寧 / 大坪一夫 / 水谷修：日本語音声学：くろしお出版 p 171
- \* 15. 天沼寧：同上 p 86, p 87
- \* 16. 川崎直一：基礎エスペラント：大学書林
- \* 17. 矢崎源九郎：日本の外来語：岩波新書 p 211
- \* 18. 天沼寧： \* 13 に同じ p 102
- \* 19. 大坪一夫：同上 p 48, p 78
- \* 20. 外来語と英語教育(2)：東京都中学校英語教育研究会・研究部 p. p 17 ~ 35